

## 祭粟屋五百蔵君文 : 文苑

著者	飯田, 御世吉郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	4 2
ページ	3 8 - 3 9
発行年	1895-12-26
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4762">http://hdl.handle.net/2298/4762</a>

全 評 晴間の松風を時雨の聲に聞きなせる意言外にあり

曉霜

ありあけのさやけき月の光ともおさまたはせる淺茅の霜

全 評 古へ月を見て疑是地上霜さいひこれは霜を見て月を疑ふさりにをもしろし

落葉

山めくる時雨ふりくと眺むればはれゆく跡に木の葉ふるなり

全 評 落木晴天雨の意をよくみ得たり

山冬月

さやけきは冬こそまされ白雪の中より出づる山の端の月

全 評 白雪の中より斬新

雪意

中々に雪氣身にしむ冬の日は枯木に花の咲くを待たる

山家夕

夕されはすむわか宿を音つるゝ人も嵐の音のみにして

蝶 女子

福地 虎雄

禊 川

祭粟屋五百藏君文

飯田御世吉郎

人。生。可。悲。者。無。大。於。死。焉。而。死。莫。大。於。有。爲。之。才。學。業。半。成。而。中。道。斃。焉。如。故。粟。屋。五。百。藏。君。之。死。可。謂。死。之。最。可。悲。者。矣。君。夙。遊。于。我。第。五。高。等。學。校。螢。雪。孜。々。數。年。如。一。日。未。嘗。懈。

怠將卒業而歲之四月蓋焉逝矣嗟于悲哉君之朋友已聯袂負笈于帝國大學前途如春  
余等竊期他日當見君於滬堤櫻雲如湧處不圖今忽吊君之靈於此風露淒涼山川蕭條  
之地嗟于悲哉君資性快潤接人不設城府遺韻宛然猶見于肖像之上焉燈火耿耿乍明  
乍滅影亦隨隱見愜乎其容隔々欲動而不動也嫣然其笑如溢唇頭而不溢也雖其容不  
動其笑不溢君之神靈必當髣髴乎來在余等之左右矣行旅倥傯無物可供焉千行血淚  
滿腔赤誠以祭君之靈尙饗

丙田遠湖先生批

### 觀名護屋城址有感而作

天放生

大海森茫濤拍天碧灣斜通古墟邊古墟高在萬仞上阪道如梯壘壁整憶昔豐公抱奇策  
欲奴三韓臣明國占得形勝築行營層樓連雲不可測英雄何須五湖游俯弄八道四百州  
絕海連檣從此發意氣軒昂貫斗牛今見山郭幾百雉中央之巔平似坻遠望對州近壹州  
風光兼領海山美侯第伯邸斷礎存想見千軍萬馬屯土人往々獲古瓦桐章猶認舊時痕  
勿謂窮兵出躁佻勿謂喪兒慰寂悄漢武雄才石勒胸襟々落々日月皎我來探勝自唐津  
呼子灣頭喚渡頭秋深氣清景更好村老爲導語慇懃吁噫如今東洋風雲惡猛鷲奮翹圖  
貪攫懷古慨然感不堪誰追這老逞雄略

稼堂曰。意到筆隨。若讀一篇紀行。而格法謹嚴。無一懈筆。蓋爲古詩。非深於文者不能也。吾兄深於文矣。所以有此巨作也。